

# 序章 近世・近代の言語文化と漢文訓読

## 第一節 近世における漢文訓読の展開

### 一 近世における漢文訓読の流れ

『論語』をはじめとする漢籍は、古来、博士家において漢文訓読法が受け継がれてきた。しかし、中世において朱子新注が日本に伝えられると、それは学士・学僧（特に五山僧）を中心に訓読されるようになり、そのため、訓読の面でも大きな変化が生ずる。それを典型的に示すものが、桂庵玄樹の『桂庵和尚家法倭点』に記された次の記述である。

文字読ミヲハ、落字無キ様ニ、唐音ニ読ミ度也。其ノ故ハ、偶<sup>オウ</sup>一句半句ソラニ覚ユル時、ヲキ字、其ノ何ノ字有ルコトヲ知ズ、口惜哉。

古来博士家において不読とされていた字（ヲキ字）も読み、また、なるべく音読（唐音）を用いるべきだと主

張している。この桂庵玄樹が加点した訓点本は存在しないが、その具体的な訓読法は、桂庵の弟子、月渚・一翁を経て文之玄昌に伝えられた。この文之が施した文之点<sup>(2)</sup>は、門人如竹によって京都で刊行され、近世初期には広く行われたようである。その訓読法については、川瀬一馬(一九四三)において、

其の後続いて現れた諸家の点本も、時に交替はあつても、其の基調を為すものは「文之点」であり、之を遡れば、即ち「桂庵点」である。  
(一四五四頁)

また、中田祝夫(一九七九)でも

江戸時代は要するに、文之点流の訓読方法と伝統的な博士家の訓読方法の対立混合の歴史、岐陽の提唱した新しい訓読方法が博士家の古風な訓法を圧倒して、広く世に普及して行つた歴史である。  
(一六七頁)

と述べられているように、中世までの訓読法と近世以降の訓読法とを分ける一つの分岐点となつたと言えよう。<sup>(3)</sup>

その後、近世における漢文訓読法は、太宰春台の『倭読要領』に、

薩摩ノ僧文之四書ヲ読ミ、羅山先生四書五経ヲ読ミテヨリ、後來コレニ倣フ者数十家、各々其本アリテ世ニ行ハル  
(巻上一裏)

とあるように、様々な訓読法(二〇〇点)のように呼ばれることが多い)が登場している。まさに、近世は漢文訓読の最盛期であつたのだが、それは後述するように転換期であつたとも言えるのである。

また、近世の訓読法は、近代の漢文訓読体へと影響を与えることになるが、近代の言文一致の立場からすると、近代の漢文訓読体、そしてその語法のもとになつた近世の漢文訓読法は、当然批判の対象となる。そこで、近世における漢文訓読語法の変遷が、近代においてどのようなようにとらえられていたのかを、言文一致に関する記述から見てみたい。三種を引用する。

漢文体とは、漢文へ施したる訓点より変化したるものにて、その訓点には種々ありますが、最も勢力ありしは、道春点、後藤点、一齋点の三でありました。其訓点によりて論語孟子杯を読み、その語路を覚えて居つて、自分に文章を書く時にも、それを用ゐることあります。さてその訓点といふものも正しいものならば宜しかれど、甚不規則なるもので、特に一齋点の如きは、極めて誤りが多い、所が其誤りを其俚に読み、それを其語氣のまゝにかく故に、その文章も甚拙劣であります。

(落合直文「文章の誤謬」(『皇典講究所講演』十一、明治二十二(一九八九)年・七・十五)

道春点は出来得るだけ国語に反せざるやう国語をくづさぬやうにと勤めたるに、闇齋点はやゝ之を破りて漢文の都合をよくしたる跡見ゆ。後藤点はなほ一步を進めて音読を多く用ひ国語に遠ざかる事ますます甚だし。一齋点に至りては全く漢文の奴隷と為りて国語の為をば夢にも思はざるが如し

(大和田建樹「文体の一致を論ず」(『国会』明治二十四(一九一〇)年・九・二十一・十七)

漢文を書き下しに翻訳したやうな塩梅のものが立派な話し方のやうに思はれ、却て口で言ふ言葉が漢文を読み慣れた人には頗る俗に思はれるやうになつて来た、それが追々激しくなつて来て、晩近に至つては昌平学校に佐藤一斎と云ふ先生があつたが、其先生は漢文の読み方を成るだけ簡略に読ませる主義で色々直した為にもう一層日本の言葉を毀はした (加藤弘之「言文一致論集」明治三十四(一九〇二)年・二・十七)

右の文章に登場する近世の訓読法としては、道春点(林羅山の訓読法)・闇齋点(山崎闇齋の訓読法、「嘉点」とも)・後藤点(後藤芝山の訓読法)・一斎点(佐藤一斎の訓読法)などの名前が確認できる。そして、道春点は「出来得るだけ国語に反せざるやう国語をくづさぬやうにと勤めた」ものであるのに対し、一斎点は、「極めて誤りが多い」「全く漢文の奴隷」「もう一層日本の言葉を毀はした」と非常に評判が悪い。ただし、右の記述では、近世漢文訓読語法のどのような点が問題であるのかはわからない。それでは、具体的にどのような点が問題と考えられたのであろうか。次の大槻文彦『広日本文典別記』は、文語文法の基準を示したものであるが、その序論にやや具体的な記述がある。

○国文の語格のくだけたる、支離滅裂せる、今代のほどなるはあらず。其原因をたづぬるに、多年の言語の変遷にも因るべく、学校の教育なかりしにも因るべしといへども、其最大原因は、全く漢文の訓点にありて、その禍源となりしも、近百年以来輩出せし訓点にあり。

四書五経にても、道春点などいふものは、訛れりし所なきにしもあらず、なほ、古の菅家江家の点の遺流を受けて、捨仮名、振仮名に、自、他、能、所、過去、現在、未来、などの語格依然として存せり。然る

に、かの寛政の三助先生の頃よりして、古訓点の振仮名を捨て、専ら音読すること起りぬ。さるは、同訓なりとして、異字異義なるが多きを、唯、訓にて口拍子に覚えてのみありては、異字ある方に、注意薄くなりて、漢書を読むに、異義あるを混同して解し、漢文を作るに、文字の顛倒、又は、和臭の用語など起る、そを防がむとし、矯めむとするよりのわざなりしと聞く。さて此の三先生の頃よりして、漢学漢文の、大に進みて面目を改めしことも著し。漢文専攻の上に就きては、さてもあるべし、(音読するのみにて、漢書を解し、漢文を作るべきにもあらず、)されど、これよりして、古訓点といふものは、破れそめぬ。

一旦破壊のいとくちを開きしより、後の儒家の何点何点といふものには、古訓点の振仮名も、捨仮名も、甚しく抹殺して、己がじ、あらぬものに改めて、(国学としては、さらにせざれば、)さらに法をも格をもなさぬものを作り出でたり、その甚しきものを、一斎点なりとす。これぞ、語格破壊の禍源罪魁にはある。

ここでも、道春点については、博士家の訓読法を受け継いでおり、「捨仮名、振仮名に、自、他、能、所、過去、現在、未来、などの語格依然として存せり」と評価されているが、近世後半から訓読法が次第に簡略になり、その最たるものが、やはり「語格破壊の禍源罪魁」とまで記されている一斎点であるということが記されている。さて、その簡略になった近世後期の訓読法の具体的な特徴は、右の引用をもとに、

- ① 補読語(読み添え語)の減少
- ② 音読の増加

この二点にまとめられることができるのではないかと思う。(4) (この点については、第一章で詳しく考察していきたい。)

このように、近世漢文訓読の流れを一言で言えば、博士家から引き継がれてきた前期までの訓読法が、後期になるにしたがつて簡略になっていく過程ととらえることができるのだが、では、その前期と後期との分岐点は近世のどの時期になるのだろうか。大槻文彦によれば、「かの寛政の三助先生の頃より」とされているが、本書では、荻生徂徠とその弟子太宰春台が漢文訓読自体を否定する論を出した時期に注目し、その主張の中に、訓読の変化をおこさせる要因があったのではないかと考えてみたい。そこで、その漢文訓読否定の論を見ておくことにする。まず荻生徂徠は『訓訳示蒙』の中で、

今、学者訳文ノ学ヲセント思ハミ、悉ク古ヨリ日本ニ習来ル、和訓ト云フモノト字ノ反リト云モノトヲ、破除スベシ  
(巻一・三十一裏)

と述べ、さらに、『訳文筌蹄』初編巻首の「題言十則」は、それ自体、漢文訓読を批判した論として有名であるが、その中においても、

但だ此の方には自ら此の方の言語有り、中華には自ら中華の言語有り。体質本より殊なり、何に由りて吻合せん。是を以て和訓廻環の読み、通すべきが若しと雖も、実は牽強たり。(中略) 故に学者の先努は、唯だ其の華人の言語に就きて、其の本来の面目を識らんことを要す

〔荻生徂徠全集〕2、みすず書房、一九七四年、五四七頁)

故に予れ嘗て蒙生の為に学問の法を定む。先づ崎陽之学を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てして、和訓廻環の読みを作さしめず。(同五五五頁)

として、「和訓廻環の読み」である漢文の訓読を廃し、直接漢文を中国語として理解することを主張している。さらにこの説は弟子の太宰春台にも引き継がれ、『倭読要領』では、

凡中華ノ書ヲ読ムハ、中華ノ音ヲ以テ、上ヨリ順下ニ読テ、其義ヲ得ルヲ善トスレドモ、吾国ノ人ニシテ、華音ノ読ヲ習フコト容易ナラネバ、已コトヲ得ズシテ、倭語ノ読ヲナスナリ  
(巻上二表)

と、漢文は本来「中華ノ音ヲ以テ、上ヨリ順下ニ読」むのが望ましいが、「吾国ノ人」は「華音ノ読ヲ習フコト容易」ではないので、漢文訓読も「已コトヲ得」ないものだと主張されている。また春台は同書の「顛倒ノ読文義ヲ害スル説」の中で、

顛倒トハサカサマナルヲイフ。日本ノ人ノ言語ハ、皆サカサマナリ。中華ノ人ハ、「治国平天下」トイフヲ、日本ノ人ハ、「国ヲ治ム、天下ヲ平ニス」トイフ。中華ノ人ハ「無所不至」トイフヲ、日本ノ人ハ、「至ラザル処ナシ」トイフ類ナリ。中華ノ人ノ先ニイフコトヲ後ニイヒ、中華ノ人ノ後ニイフコトヲ先ニイフ。凡言語皆カクノ如ク上下顛倒ス。(中略) 今吾国ノ人、中華ノ書ヲ以テ、此方ノ語トナシテ、顛倒シテ読ム故ニ、文義ヲ害スルコト多シ  
(巻上十一表)

と述べた後、訓読することによって意味が通じなくなる例として、「ミル」に対する「視・観・覽・察」等の同訓異字を挙げた上で、次のように結んでいる。(春台は、吉備真備が漢文訓読を創始したとする。)

然レバ吉備公ノ国字ヲ造リ、倭語顛倒ノ読ヲ創ケルハ、後ノ学者ニ甘キ毒ヲ啗シメタルニアラズヤ。此毒人ノ骨髓ニ滲テ除キガタシ。若コレヲ除ントオモハハ、華語ヲ習フニシクハナシ。華語トハ中華ノ俗語ナリ。今ノ唐話ナリ。サレバ文学ニ志アラン者ハ、必唐話ヲ学ブベキナリ (卷上十四表)

このように、漢文訓読自体を否定し、そして音読を多く用いて、なるべく漢文を漢文のまま読んでいくという姿勢は、まさに①補読語をできるだけ少なくし、②音読を多く用いるという、先に述べた近世後期の訓読法の特徴を表すものであり、これらの主張を一つの契機として、近世漢文訓読が大きく変化していったということができよう。

さて、その一方で、近世後期においても、前期のような比較的詳しい訓読を行うものも登場した。国学者でもある鈴木眼や、『訓点復古』を著した日尾荆山の訓読法がそれにあたるが、それらはいわば「復古的な訓点本」と名付けることができよう。では、「復古的な訓点本」は、どのような主張で訓読を行ったのか、その理論をみておきたい。まず、日尾荆山の『訓点復古』には、次のように記されている。

此ニ宿儒有、常ニ朱子学ヲ奉ス。其四書集注ノ句読ヲ授ルヲ見ルニ、惺窩羅山ニ先生ノ古点ヲ芟除シ、ヤ

クタイモ無キ読癖ヲ作リテ、一家ヲ成サントス。是則朱子学ヲ奉シテ朱子ニ背ク也。不敬トヤ云ン、非礼トヤ云ン。如何トナレハ、其訓点ト称スル所ノ者、一言半句モ法ニカナハズ、朱子ノ注意ヲ誤ルヲ以也。況ヤ彼ニ先生ハ、皇国ノ典籍ニモ明ニシテ、注釈シタマヒシモ鮮カラズ。サレバ訓義ノ雅訓、テニテハノ照応、仮名格等マデ、心ヲ用ヒ玉ハザルハナシ。(中略)後進ノ学者、彼ニ先生ノ万分ガ一ニモ及不、妄ニ其訓点ヲ改竄セシテ、俛眉承睫ノ徒コレヲ学ビ、雅馴ノ訓義ヲ以テ贅疣トシ、氏爾乎波ヲ抹却ス。惑ルモ亦甚矣。カクテハ、儒者ト称スル者ニ、皇国ノ詞ヲ曉ス人、日々々々ニ少ク、古点モ跡方ナク成モヤセント、最嘆ハシク覚ユル者カラ、其謬妄ノ尤ナル者ヲ挙テ、此ニ弁駁ス。(中略)或ハ此書ヲ閱テ、今点ノ非ヲ悟ン人、立地ニ古点ニ復セヨ。(卷下一丁表)

同書中に「謬妄ノ尤ナル者」の例としてあげられている語法は、明記はされていないものの、佐藤一斎の一斎点で、この本の中で具体例を挙げながら、その簡略な訓読法(先に引用した言文一致の論などでも評判が悪かったが)を非難している。そして右の記述から、荆山が訓読の手本とし、「復古」しようとしていたのは近世初期の藤原惺窩・林羅山の訓点であることが窺える。

一方、鈴木眼には、『訓点復古』とほぼ同時期に刊行された『改正読書点例』があるが、同書の丹羽昂による「はし書」には次のように記されている。

今漢学者字音を正す事のみを知て、訓のさだを忽にし、漢語の意さへたがはざれば、和訓の心はあたらずも苦しからずと思ひをるは、本末の弁へなく、御国の言霊に対しても恐れある事なり。また今の漢籍読に御国

の古語の伝はりたる事あり。師の此書を読みと、さる類ひを弁へ得ば、漢籍も亦御国学ひの便りとなること有べし。

つまり、単純な「古い訓読法への復古」という主張にとどまらず、漢文の訓読も国語文の一つである、という意味が前提になっていることが窺える。そして鈴木胤の訓点もこのような姿勢で付けられているため、現代においても、中田祝夫（一九七九）により、次のような評価が与えられている。

国語に関心が深ければ破格の訓点が排斥されることは、鈴木朗の論語参解（文政三年刊）などによつて判明する。彼が国語学上の種々の業績をあげたあとの刊行になるものだけに、江戸末期の極端な訓点の盛行する中にあつて、よく純正さを守り得てゐるものである。（一七三頁）

以上述べてきたように、近世に登場する様々な訓読法は、〈前期の訓点本〉〈後期の訓点本〉そして〈復古的な訓点本〉と分けることができるのである。それぞれに属する訓点本のうち、本書で扱うものを簡単にまとめてみると、次のようになる。

## 二 近世に現れた訓読法

それぞれの訓読法の特徴の詳細については次章以降で具体的に述べていくことになるので、ここでは、先行研究等で指摘されているそれぞれの訓読法の特徴と加点者について簡単に記しておくことにする。

### 〈前期の訓点本〉

#### ○ 文之点

前述のように、文之玄昌（二五五五〜一六二〇）は、桂庵玄樹の系統につながり、そのため文之点は桂庵玄樹の訓読法を良く伝えるものである。

#### ○ 道春点

江戸時代は、幕府が官字として儒学を奨励したため、漢学が非常に盛んであった。その基礎を築いたのが、幕府の儒官であった林羅山（二五八三〜一六五七、名は信勝、剃髪して道春）である。羅山は清原家の家学を学んでいるので、当然その訓読法も博士家の影響を受けていたものと考えられるが、その一方で、四書新注の公開講義を行い、舟橋秀賢（二五七五〜一六一四）から非難を受けたとされる。このように、道春点は、博士家の伝統的な訓読法に沿いつつも、新注による桂庵式の訓読法をも取り入れた部分もみられる。

また、この道春点は、江戸時代における訓点の代表格として、江戸時代を通じて刊行されている。しかし時代が下ると、名前こそ「道春点」とは称していながら、林羅山が加点した初期のものとは異なるもの、それも、その時代の訓読法の流行に合わせたものが登場してくる。<sup>5)</sup>つまり、道春点は、近世の『四書集註』訓読における代表的存在であり、また範とされてもいたのである。

#### ○ 石齋点

鵜飼石齋（二六一五〜一六六四、名は信之、字は子直）は藤原惺窩門下の那波活所の門人である。そのため、藤

原惺窩の訓読法とのつながりを考える点でも石齋点は注目される。石齋点の訓読法の特徴は、鈴木直治（一九七五）によると、道春点が基礎的な初級向きのものであったのに対し、石齋点は中級上級向きのものであり、「原文に即して、かつ、簡潔に読むことに努めているもの」とされる。

○ 嘉点

山崎闇齋（二六二八～一六八六、名は嘉、通称嘉右衛門、字は敬義、別号は垂加）の嘉点もかなり広く普及していたようで、その特徴は、中田祝夫（一九七九）によると、「新注と古点との適度の融合で、両派の意見が折衷されてゐるやうである」とされる。なお、太宰春台の『倭読要領』に、「山崎氏」を非難する記述が出てくるが（第一章注（3）参照）、この「山崎氏」が山崎闇齋を指すのかどうかは今のところ不明である。

○ 仁齋点

伊藤仁齋（二六二七～一七〇五、名は維楨、は源佐、別号は棠隱）は、古義学を唱え、『論語』も新注に抛らず独自に解釈し、それに沿って訓読しているのです、時に他の訓点本と読み方の違いが生ずることもある。その訓読法はやや簡潔になってきているが、それでもまだ春台などに比べると古形を保っている。

○ 惕齋点

中村惕齋（二六二九～一七〇三、名は之欽、字は敬甫、通称は七左衛門・仲二郎）の惕齋点は、漢字に対する振り仮名が非常に詳細で、さらに濁音を表記していることも多い。また、近世前期にあつてもかなり擬古的な特徴を有している。

微を有している。

〈後期の訓点本〉

○ 春台点

太宰春台（二六六〇～一七四七、名は純、通称弥右衛門、字は徳夫）は、先に述べたように、師の荻生徂徠の意見を受け、和訓と「顛倒」とを否定した。実際、春台の『論語古訓正文』でも、音読することが多くなっている。

○ 後藤点

後藤芝山（二七二二～一七八二、名は世鈞、字は守中、通称は弥兵衛）は林家の家塾に学び、後藤点の『四書集註』は「林家正本」として広まった。しかも幕府の寛政異学の禁のため、後藤点が「素読吟味」の基準として使われた。このように、近世前期の訓点本の代表が道春点であるならば、近世後期の代表格はこの後藤点ということになる。

○ 山子点

片山兼山（二七三〇～一七八二、名は世璠、字は叔瑟、通称東造）は最初徂徠学を学んだが、のちにこれを批判し、漢宋諸家の説を折衷して一家をなした。その訓読法を「山子点」と称し、音読を多く用いる点が特徴的である。

## ○ 冢田点

冢田大峰（二七四五〜一八三二、名は虎、通称多門）は尾張藩明倫堂の督学となった。中田祝夫（二九七九）に、「春台以降において、もつとも強く語格を破つたのは塚田大峰で」とあるように、この冢田点も音読の傾向が強い。

## ○ 一齋点

佐藤一齋（二七七二〜一八五九、名は坦、字は大道、通称は幾久蔵、また捨蔵）は昌平黌の儒官を勤め、多くの藩に招かれて、門人も多く有していた。そのため、一齋点は、後藤点とともに明治以降も版を重ねている。また、一齋点の影響を受け、一齋点の訓読法にならう訓点本もみられる。天保八年重刊の『小松版四書集註』、藤井柳所（？〜一八六七、名は穆、通称又蔵、盛岡藩儒）加点による『盛岡蔵版論語』（藩校明義堂から出版）、そして一齋の弟子にあたる吉村秋陽（二七九七〜一八六六、名は晋、字は麗明、通称は重介）の秋陽点などがそれにあたる。しかし、その一方で、あまりにも機械的で簡潔な訓読法には批判も多かったことは先に引用したとおりである。なお、この一齋点については、第二章で詳しく扱う。

## 〈復古的な訓点本〉

## ○ 鈴木点

鈴木胤（二七六四〜一八三七、号は離屋）は徂徠学と国学を学び、晩年は尾張藩校明倫堂教授並となった。日本語の研究者としても有名であり、その著に『言語四種論』『活語断続譜』などがある。

## ○ 日尾点

日尾荆山（二七八九〜一八五九、名は瑜、字は徳光、通称多門・宗右衛門）は『訓点復古』を著した。前述のように、一齋点の簡潔な訓読法を批判し、藤原惺窩・林羅山の訓読法に「復古」することを説くものであるが、実際の訓読法は、初期の道春点までは戻ってはいない。

## 三 近代漢文訓読体

近世漢文訓読語法は、明治以降の漢文訓読体の文章にも影響を与えている。近世のどのような訓読法が、どのような近代の漢文訓読体に引き継がれたのかについては、第二章以降で詳しく論じていくが、まずここでは、その前提となる背景、すなわち、まだ言文一致が完成していない明治初期において、漢文訓読体という「型」がどのように享受されていたかについて考えてみたい。

周知のように、明治以降において、『佳人之奇遇』『欧州奇事花柳春話』をはじめとする、漢文訓読体で書かれた小説は多くの読者に支持されていた。その具体的な例としてよく引かれるのが、徳富健次郎『黒い目と茶色の目』であり、その中には、『佳人之奇遇』が同志社の寄宿生の間で人気を博していたことを表す次のような記述がある。

其頃佳人之奇遇と云ふ小説が出て、字を読む程の者は読まぬ者はなかつた。

佳人之奇遇の華麗な文章は協志社にも盛に愛読され、中に数多い典麗な漢詩は大抵暗記された。

朗々と吟ずる時は、寮々の硝子窓毎に射すランプの光も静に予習の黙読に余念のない三百の青年ぶるくんと身震ひして引き入れられるやうに聞き惚れるのであつた。木版片仮名まじりの字の大きい藍色の



表紙をつけた和綴の其本は、協志社でも其処此処のテーブルのつて居た。

(岩波文庫版使用、一九三九・三、九五〜九七頁)

また、亀井秀雄（一九八三）や小森陽一（一九八八）は、近代の漢文訓読体を、福地源一郎の用語を用いて「棒読風」漢文体と呼んでいるが、その文体が読者に与えた効果について次のように指摘している。逆に言えば、後述のような効果があるからこそ、読者に好まれたとも言えるのである。まず、小森は次のように述べている。

立身出世をめざして都会に集まり、「俗語」で書かれた恋愛譚Ⅱ人情本による感情教育を経た書生たちは、『花柳春話』の中に自分たちの理想と決意を綴る文体Ⅱ「棒読風」漢文体によって形象化された、理想的な愛の世界を発見したのである。立身出世と理想的恋愛の成就という、書生たちにとつての二つの大きな夢が、『花柳春話』という小説において「棒読風」の漢文体によって実体化されたのである。（九二頁）

さて、これらの作品に最も特徴的な点は、「著者のことば」(地)も「他者のことば」(詞)も、同一の文体Ⅱ「棒読風」の漢文体で綴られていたということである。(中略)「棒読風」の漢文体によって書かれた作品においては、「著者のことば」と主人公の「詞」(他者のことば)は原理的に同一のものとなる。だからこそ、これらの作品は一つの調子で高らかに「棒読」されることによって最もよく享受されえたのである。このようにして読者は、矛盾なく主人公と自己同一化し、理想的な自己像を、彼を通して生きることができたのである。（九二頁）

そして一方亀井は、

かれらの漢文訓読体は、伝統的な和文脈の表現に固有な身分関係的な(敬語法的な)感性を否定し、これを克服する役割を果たしてきたということである。（三五頁）

棒読体に近いその文体は、ただ「本邦今世ノ文ニ做ヒ」という単純な理由によって選ばれただけかもしれないが、結果的には、身分関係的な感性を遮断した文体のおかげで、その異性との関係をあくまでも対等の人間的連帯として貫ぬこうとする構想が実現でき、人情本的な恋愛観の変革をなし遂げることができたのである。（四二頁）

右のように、対等(身分関係、また異性関係において)な人間関係を意識させるという効果について述べているが、漢文訓読体という伝統的な型であるにもかかわらず、それが可能であったのは、「棒読風」と称されるほど簡略なものであったからこそであろう。しかし、この漢文訓読体という型がこのような効果を与える前提として、当時の作者(訳者)と読者との間に共通に有する何かが必要ならなければならない。それは福地源一郎が

維新以来廟堂の上に立て枢機に当れる元勳諸公の如き若くは文壇に立て新日本の文物を勧奨せる諸先覚の如き大抵旧日本の頃には学生にて実用文体にも慣れず其体段をも心得ず専ら漢籍(若くは洋書)を読み其文を喜べる人々なりければ通俗体の不雅なるよりは漢文体の高尚なるを愛し自らも其体を書き人にも亦其体を書し

と述べているように、それらの作品の作者(訳者)であり、また読者であった当時の知識人が漢学の教育を受けていることに起因すると思われる。『佳人之奇遇』の著者東海散士(柴四朗)は、会津藩校日新館で漢学を学んでおり、『欧洲奇事花柳春話』の訳者丹羽純一郎も、幼少時は未詳だが、長じて後十八才で昌平黌及び高知致道館に留学している。そして、その漢学の教育の中でも、とりわけ初学の段階で行われる「素読」という学習形態が与えた影響が大きかったのである。素読では、訓読された漢文の暗誦に主たる目的が置かれ、前田愛(二九九三)が、

漢籍の素読はことばのひびきとリズムとを反復誦する操作を通じて、日常のことばとは次元を異にする精神のことば——漢語の形式を幼い魂に刻印する学習課程である。意味の理解は達せられなくとも文章のひびきとリズムの型は、殆ど生理と化して体得される。やや長じてからの講読や輪読によって供給される知識が形式を充足するのである。そして素読の訓練を経てほぼ同質の文章感覚と思考形式とを培養された青年たちは、出身地・出身階層の差異を超えて、同じ知的選良に属する者同士の連帯感情を通わせ合うことが可能になる。(二八一頁)

と指摘するように型としての漢文訓読体を身につける学習方法であり、それを初学の段階で徹底することによって、文章の共通基盤が知識人達の中に形成されるのである。東海散士も丹羽純一郎も著作・翻訳という文章化の段階で、素読によって身につけた漢文訓読体という「型」を選択したのである。<sup>(6)</sup>

本書で取り上げるのは、その「型」が近世においてどのように形成され、また近代に受け継がれてきたのか、そしてその具体的な姿についてである。なお、「型」と近代日本語との問題については、終章であらためてとりあげる。

#### 四 漢文訓読と蘭学・英学

一方、漢文訓読は、近世および近代初期において、オランダ語・英語の学習・翻訳にも利用されている。もともと漢文訓読は、漢文という外国語に対して、原文をそのまま残して、そこに数種の文字や符号を加えることによつて日本語へと変換する翻訳法である。漢文訓読に慣れた江戸時代の知識人にとつて、オランダ語・英語という外国語を日本語に直していく際に、漢文訓読的な手法が利用され、漢文訓読の語法が使用たのはごく自然なことであった。<sup>(7)</sup> 本書でも第五章などで具体的に論じていくが、ここでは、オランダ語・英語の学習に対して「漢文訓読」が果たした役割について簡単にふれておきたい。

まず蘭学の租とも言える青木昆陽(二六九八―一七六九)は、『和蘭話訳』(寛保三(一七四三)年成立)において、オランダ語について「其言語我国ノ言語ニ比スレバ甚ダ倒シ」(二頁)と、日本語とは語順が異なることを指摘している。次に、『解体新書』の事実上の翻訳者であった前野良沢(二七二三―一八〇三、号は蘭化)であるが、杉本つとむ(二九九二)に以下のような指摘がある。

『解体新書』翻訳とその中心人物、前野蘭化の語学力を精査してみたとき、あくまでもベースは漢文訓読法であつて、訓点をほどこして、訳文を作成しているのみ、文法にはほとんど無知で、まったく無手勝流と

いっても過言ではない。

(三八三頁)

その良沢の『和蘭訳筈』には、オランダ語の翻訳方法が「蘭化亭訳文式」として記されている。それは、

凡、翻訳ヲ為ス者、宜先線字ヲ用テ、原文ヲ謄写スベシ。次ニ、每言下訳字ヲ記ス。(中略)次ニ甲乙等小字  
鈴ヲ附シテ、語路ヲ指点スベシ。(『洋学 上』日本思想大系、岩波書店、一九七六年、一二〇頁)

というように、まさに漢文訓読を応用したものであり、その後に掲げられた実例では、オランダ語一語一語の下に、その訳語と、語順を示す記号(甲乙丙…の十干、十一語以上の場合には、それに十二支が加わる)が付されている。

さらに大槻玄沢(一七五七〜一八二七)の『蘭学階梯』(天明八(一七八八)年刊)になると、オランダ語学習方法が具体的に詳しく記述されるようになる。それによると、「先ヅ初メハ、怠り無く単ヘナル言辭ヲ多く記憶スベシ」と、アルファベット順に単語を集めた小冊子を作ることおすすめ、次に下巻「訳辞」の項で、

其書ヲ読ミ習ヒ、從テ其義ヲ解セント思ハミ、先ヅ初ノ内ハ、釈辭ノ書中ニ記スル註釈ノ成語カ、又他ノ書  
中ヨリナリトモ、短キ文ヲ抄出シ、訓訳ヲ施スベシ。其法ハ、即チ、其文ノ毎語ノ傍ヘ、右ノ書キ集メタル  
小冊ノ中ヨリ拾ヒ取テ、其訳字ヲ施スベシ。(『洋学 上』日本思想大系、岩波書店、一九七六年、三五八頁)

と、一つ一つの単語に対して、先に作成した単語集をもとに、訳を付けるという段階が示され、そしてさらに語

順を「顛倒」させて解釈していくことが「訳章」の項の中で、次のように記されている。

其文、毎語訳字ヲ加フルトイヘドモ、支那ノ書ヲ和読スル意口持ニテ、顛倒ヲ用ヒテ読ミ解セザレバ、通ゼ  
ヌナリ。是ハ当時ノ旧染ニシテ、已ム事ヲ得ザル所ナリ。支那ノ直行右読、和蘭ノ横行左読ハ、其法縦横ノ  
差ヒナレドモ、顛倒セズシテ義理ノ通ズルハ同コトナリ (同 三五九頁)

つまり、前野良沢と同じく、漢文訓読の手法を利用しているのである。その後、このような漢文訓読の手法を用いたオランダ語の学習方法は、藤林普山(一七八一〜一八三六)の『蘭学逕』(文化七(一八一〇)年刊)、総撰館『訓点和蘭文典』(安政四(一八五七)年刊)などに引き継がれ、さらには『ウキルソン氏第弍式リード独案内』(馬場栄久・細井傳吉合訳、随時書房、明治十八(一八八五)年)などのような幕末以降の英語の学習にも利用されていくのである。

しかし、このような漢文訓読的な手法が、オランダ語学習、そして翻訳にとって必ずしも最善ではないとの意識もあつたようで、先に引用した『蘭学階梯』「訳章」の文章中には、「是ハ当時ノ旧染ニシテ、已ム事ヲ得ザル所ナリ」と記されており、さらに次のように続けられる。

功ヲ積テ、助語ノ意ヲ自然ニ解シ得レバ、顛倒セズシテモ発悟スルナリ。(中略)是、唐音ニテ書ヲ読ムニ、  
上ヨリ下ヘ順直ニ読ミ下シテ、其義通ズルト同ジキ理ニテ、却テ其義ヲ明白ニ解シ得ルコト、顛倒シテ読ム  
ニ勝ツテ、言外ノ意味アリ。元来、彼方ノ言辞遙ニ別ナルコトナレバ、蘭語ヲ悉ク倭語・漢語トナシテ読ン

後		期		前		期	
小松版	一齋点	冢田点	山子点	道春点C	後藤点	春台点	惕齋点
(小松版) 四書集註 天保八(一八三七)年重刊	(林家正本) 四書集註 佐藤一齋点 文政八(一八二五)年跋	冢田大峰点 天明四(一七八四)年刊	片山兼山点 天保九(一八三八)年刊	(文化改正) 四書集註 文化七(一八一〇)年再版	(新刻改正) 四書集註 後藤芝山点 寛政六(一七九四)年刊	論語古訓正文 太宰春台点 宝曆四(一七五四)年刊	四書示蒙句解 中村惕齋点 享保四(一七一九)年刊(寛政二(一七九〇)年修)
							仁齋点
							嘉点
							石齋点
							道春点B
							道春点A
							文之点
							大魁四書集註 文之玄昌点 寛永九(一六三二)年刊
							四書集註 林羅山点 寛文四(一六六四)年刊
							(寛政改正) 四書集註 寛政元(一七八九)年刊
							四書集註大全 鶴飼石齋点 慶安四(一六五二)年跋刊
							四書集註 山崎闇齋点 明和五(一七六八)年刊(寛政七(一七九五)年修)
							論語古義 伊藤仁齋点 正徳二(一七一二)年刊

トスレバ、却テ其義ヲ失フコト多シ。

(同 三五九頁)

玄沢の右の記述の中にも「唐音ニテ書ヲ読ムニ、上ヨリ下へ順直ニ読ミ下シテ、其義通ズルト同ジキ理ニテ」と、漢文訓読への言及がみられるが、「語順を変えて解釈する手法に頼らず音読で直読することを重視する」という主張は、先に見たように、漢文の世界においても既に示されていたものである。

## 第二節 本書で使用する資料

本書で使用する江戸時代の訓点本および漢語文典等は次のようなものである。その他の蘭字・英学関係資料、近代漢文訓読体資料については、その都度紹介していく。

### 一 江戸時代の漢文訓読資料

本書においては、調査対象の資料として、江戸時代において比較的よく読まれ、様々な訓点本が存在している『論語』を使用した。章によっては、『論語』以外の漢籍を使用する場合もあるが、それらについてもその都度紹介する。(先に述べた分類により、「前期(の資料)」「後期(の資料)」「復古(的な資料)」に分けて記した。また順番は、刊行年をもとに、加点点者の生没年を加味して並べてある。)

復		古	
日尾点	慶應新刻論語 日尾荊山点 刊記なし	道春点D	(天保校正) 四書集註 文政十三(一八三〇)年再刻
鈴木点	論語参解 鈴木眼点 文政三(一八二〇)年序	道春点E	(文久改正) 四書集註 文久三(一八六三)年再刻(版心「萬延新刻」)

林羅山の訓読「道春点」は、前述のように、江戸時代における訓点の代表格として江戸時代を通じて出されている。しかし時代が下ると、名前こそ「道春点」とは称していながら、林羅山が加点了初期のものとは異なるもの、それも、その時代の訓読法の流行に合わせたものが登場してくる。そこで、表には、「道春点A」から「道春点E」の五種類をあげ、調査してある。このうち、「道春点A」「道春点B」が前期の資料に入り、「道春点C」は名前こそ道春点ではあるものの、後藤点と非常によく似た訓読を行っている。また、「道春点D」「道春点E」は、江戸後期に刊行されたものではあるが、比較的詳しい訓読を行っているので、「復古的な資料」に入れることにした。

## 二 博士家の資料

また、博士家における読み方を知るためには、次の資料を用いる。

『高山寺蔵論語』 中原本 巻四 嘉元元(一三〇三)年書写

大法師了尊加點(安貞二(一二二八)年中原師行、寛元元(一二四三)年中原師有の点を伝える) (『高山寺古訓点資料 第二』東京大学出版会 一九八〇)

『文永本論語』 文永五(一二六八)年 中原師秀点

巻七(首欠) 醍醐寺蔵

(小林芳規「醍醐寺蔵論語巻七文永五年點訓讀文」『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第二号 一九八〇)

巻八(首欠) 東洋文庫蔵

(石塚晴通・小助川貞次「文永本論語集解卷第八」『訓点語と訓点資料』第81輯 一九八八)

そして、全文かなで記されている次の資料も参照する。

『かながきろんご』 室町時代中期成立(安田文庫叢刊第一篇)

## 三 江戸時代の仮名付資料

さらに、江戸時代における詳しい読み方を知る資料としては、仮名付の訓点本がある。この仮名付の訓点本とは、注はなく本文のみで、漢字の右または左右に、片仮名もしくは平仮名の振り仮名がついているものを指す。なお、この漢字の左右に振り仮名がついている資料(以下、「左右訓」とする)において、左側に片仮名が付された漢字は、次の例のように返読する字となっている。

子<sup>シ</sup>曰<sup>ノ</sup>曰<sup>タマハク</sup> 学<sup>マナレド</sup> 而<sup>トキニ</sup> 時<sup>トキニ</sup> 習<sup>ナラセ</sup> 之<sup>コレヲ</sup>。 不<sup>ズ</sup> 亦<sup>オモ</sup> 説<sup>ヨロコハシカラ</sup> 乎<sup>ヤ</sup>。

有<sup>アリ</sup> 朋<sup>トモ</sup> 自<sup>ヨリ</sup> 遠<sup>トホシ</sup> 方<sup>カタ</sup> 来<sup>キタル</sup> 不<sup>ズ</sup> 亦<sup>タラシカラ</sup> 楽<sup>カ</sup> 乎<sup>ヤ</sup>。(卷一・学面)

これを訓読するには、まず右の片仮名を読んでいき(シノタマハク マナンデトキニ)、左に片仮名の付された漢字(習)がある場合にはそれを一旦とばして、返点に従って戻って戻ってその左側の仮名を読んでいけば良い(コレヲ↓ナラフ)ように工夫されているものである。また、仮名付の訓点本は、いずれも小型本・袖珍本であることも特徴的である。長沢規矩也(一九七六)には、『論語』または『四書』の仮名付テキストは、「傍訓本」という名称で二十種類が紹介されている。本書では次の二種類を使用した。

。仮名付資料

- ・ 論語 新改正片仮名附本(道春点)
- ・ 論語 片仮名傍訓本(後藤点 嘉永刊 左右訓)

右の『論語 新改正片仮名附本』は、長沢規矩也(一九七六)に、「林信勝(道春)点」とあるが、刊年は不明である。道春点は、先述のように、林羅山の盛名のために、江戸時代を通じて訓点本が出版され、その訓読法も変化しているが、これは初期の道春点の訓読法によっているものである。

#### 四 斯文会訳『国訳論語』

そして、明治以降の『論語』の読み方を知るために使用したのが、斯文会訳の『国訳論語』(昭和三年、龍門社発

行)である。

この斯文会訳『国訳論語』は、その「例言」で、

- 一、本書の訳文は、専ら前人の訓点到就き、其の穩当と認めたるものに従ひ、一二の場合を除くの外は、敢て新しき読方を試みず。

と記されているように、博士家をはじめ、江戸時代の主要な訓点本も参照して訓読されたもので、その後現在にいたるまでの『論語』訓読の基準となっていくものである。

#### 五 漢語文典など

一から四にあげた資料によって、実際の訓読法を調査する一方で、漢文訓読に対する理論や当時の意識を知ることにも必要である。そのために、下記のような資料を用いる。

- 桂庵玄樹(一四二七〜一五〇八)『桂庵和尚家法倭点』(明応十(一五〇二)年成立)
- 貝原益軒(一六三〇〜一七一四)『点例』(元禄十六(一七〇三)年刊)
- 荻生徂徠(一六六六〜一七二八)『訓訳示蒙』(明和三(一七六六)年刊)
- 『訳文筌蹄』(正徳五(一七一五)年刊)
- 太宰春台(一六六〇〜一七四七)『倭読要領』(享保十三(一七二八)年刊)

- 江村北海（二七二三～二七八八）『授業編』（天明三（一七八三）年刊）  
 三浦梅園（二七三三～二七八九）『梅園読法』（安永二（一七七三）年跋、安永九（一七八〇）年追記）  
 河北景楨（生没年未詳）『助字鶴』（天明六（一七八六）年刊）  
 积大典（二七一九～一八〇二）『文語解』（明和九（一七七二）年刊）  
 日尾荆山（二七八九～一八五九）『訓点復古』（天保六（一八三五）年刊）  
 鈴木胤（二七六四～一八三七）『改正読書点例』（天保七（一八三六）年刊）  
 大和田建樹（二八五七～一九一〇）『応用漢文学』（明治二六（一八九三）年刊）  
 大槻文彦（二八四七～一九二八）『広日本文典別記』（明治三十（一八九七）年刊）  
 権田直助（二八〇九～一八八七）『漢文和読例』（明治三十六（一九〇三）年刊）

注

- (1) 本書において、文献・資料等の引用にあたっては、表記を以下のように改めてある。  
 。漢字の旧字体は新字体に直した。  
 。仮名の異体字・合字も現行の字体に改めた。  
 。本文中の傍線・傍点などは基本的に省略した。  
 。適宜、句読点・引用符などを補った。
- (2) 桂庵玄樹の訓読法を伝えるものとしては、この文之点の他、元亀四（一五七三）年書写の『論語集註』がある。現在、巻一・二・一〇の三冊しか残っていないため、本書では扱わない。

- (3) 近世初期の、文之点、道春点、そして藤原惺窩の訓読法については、村上雅孝（一九九八）『近世初期漢字文化の世界』に詳しい。また、近世の漢文訓読については、大江文城（一九三五）・鈴木直治（一九七五）・中田祝夫「中近世の訓読の沿革」（中田（一九七九）所収）・大島晃（一九八二）なども参考になる。
- (4) 近世後期の訓読法の具体的な特徴については、筆者はこれまで、この二点の他、「なるべくすべての漢字を読むようになる」という点も加えて、三点として論じてきたが、この三点目についてはさらに検討すべき点もあるので、本書ではまず①「補読語（読み添え語）の減少」および②「音読の増加」の二点を中心にとりあげていくこととした。ただ、この「なるべくすべての漢字を読むようになる」という特徴は、一齋点の訓読法を考える上で重要であり、本書でも第二章で言及することになる。
- (5) 村上雅孝（一九九八）では、  
 羅山自身が点を施したものであっても、それをすべて道春点と呼んでいいか検討すべき点もあるように思われる。基本的には、羅山在世時のものと没後のものとを区別すべきであろうし、少年の頃の修学期間の加点などを道春点と称するには問題があるようにも思われる。ここでは、羅山没後の新注による版本のものを道春点として、それに近いものも含めることにし、それ以外は羅山点と呼ぶことにしたい。また、広義の道春点はこの両者を含むものとする  
 （三四三頁）  
 として、林羅山が直接加点を付けたかどうかで、「羅山点」と「道春点」とを区別しているが、本書では「道春点」として刊行されたものは、とりあえずすべて「道春点」とした上で、その訓読法の違いを調査していくことにする。
- (6) 「素読」については、他に、中村春作（二〇〇二）・齋藤希史（二〇〇七a）など参照。
- (7) 森岡健二（一九九九）では、蘭学や英学で使われた漢文訓読的手法を、その書名の通り「欧文訓読」と呼んでおり、語法についても詳しく紹介されている。